

受 賞

今年度で第6回目となる高島賞は、九州大学の佐藤廉也さんに決定、4月22日、第9回学術大会の場で授賞式がおこなわれた。高島賞は、本学会を力強く支えてくださった高島浩一名誉会員を記念して、35歳までの若い会員の研究・活動を激励する目的で設立された。過去の受賞者は、すでに優れた中堅研究者として日本のナイル・エチオピア研究をリードしている。

この学会賞の生みの親、高島浩一名誉会員のご逝去に対して、心からご冥福をお祈りするとともに、高島賞のなかに氏の尊いご遺志が生きづけていることを改めて確認しておきたい。

<高島賞受賞記念講演>

20世紀の焼畑集落史

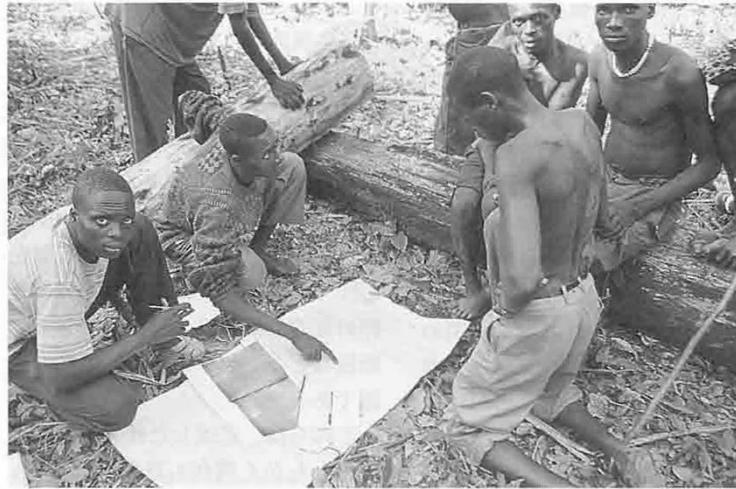
佐藤 廉也

エチオピア西部のガンベラ州・南部エチオピア州・オロモ州の州境部にあたる地域の、エチオピア高原と低地の遷移帯を空から眺めると、高い林冠に覆われた森林が広い範囲に残っているのを確認できる。この森林域を生活の場とするマジャンギル人は、森林に接するサバンナの農牧民や古くから開拓の進んでいた高原部で生活を営む人びとは異なるアイデンティティを持っている。彼らは主な生業である焼畑や蜂蜜採集をはじめ、生活の糧の大半を森林から得る。そして先祖は森林を求めて南方から移住してきたという伝承を持っている。このような人びとから森林の生活を学ぶことが、私の研究の目的だった。

焼畑を中心とする森林の生業と社会を研究するにあたり、とくに意識した点が二つある。ひとつは、森林環境下での焼畑農耕の技術、狩猟や蜂蜜採集などの森林資源の利用、集落システムの動態などを、ある程度長期的な時間スケールの中で具体的に把握す

ることである。人びとは焼畑耕地や狩猟採集のサイトを毎年変えていくとともに、大規模な集落移動を断続的におこなう。また、そうした動きに伴って、森林そのものも攪乱や遷移によって絶えず変化していく。こうした複雑な動きは、5年や10年の動きを見ただけでは、十分に把握できない。50年、100年の間にどのように変化してきたのか、またなぜそのような動きがあったのかを知る必要がある。

もう一つは、そうした森林の生活の中で、人びとが実際の社会関係や歴史の出来事の中でどのように自らをとらえ、その道筋を選択していくのかを知ることである。とくに、私が初めてこの地域を訪れた頃は、マジャンギルの人びとは集住化政策によってその生活様式を大きく変え、同時に若いマジャンギルの人びとがキリスト教受容運動を展開している最中だった。こうした変化の過程で、森林とのかかわり方も大きく変わっていた。この過程で人びとは何を選択し、何を変えたのか、事実を詳しく追ってみたいと考えた。



地形図と中空中写真を前に聞き取り調査を行なう

こうしたことを明らかにするにあたって問題となるのは、いかにして資料を得るかである。基本的な情報は、直接の観察と聞き取りである。焼畑をはじめ、日々の生業行動にはできるかぎり同伴し、行動の詳細を記録する。集落や耕地を測量して地図を作製する。同時に、数千平方キロにわたる調査地域内の集落をすべて訪れ、森林域全体の資源利用や集落分布のパターン、小地域ごとの違いを大きくつかむ。しかし、問題は、文字資料を残すことのない彼らの生活や森林の過去をいかにして知るかである。ここでも、基本的には人びとが過去について語ってくれる情報を最重視した。5万分の1地形図を人びとの前にひろげ、水場・山・川・パッチ状の草地などの地名とともに、過去集落地として伐採された場所を詳しく聞いていく。小地域ごとに、その場所に長く住んだ人びとを選んで聞いていくと、たちまち地形図の上は書き込まれた地名で埋めつくされてしまう。また、開拓や移住の時期については、そのときどきに起こった事件や当時の子どもの年齢などをもとに、比較的少ない誤差で推定することができる。

しかし、こうした情報を積み重ねても、その客觀性を検証することは難しい。この点を克服するために、さまざまな角度から過去の情報をを集め、検証することを考えた。こうした資料のひとつが、過去に撮影された航空（空中）写真である。対象地域全域で初めて航空写真が撮影されたのは、1967年だった。これらを拡大・実体視すると、その時点での集

落分布・規模がはっきりつかめるだけでなく、当時の人口の推定もある程度可能になる。また、森林の成熟度や高木の樹高、休閑林の状態から、さらに過去にさかのぼった開拓・集落放棄の事実をつかむことができる。これらを地形図上に重ね合わせ、聞き取った情報と照合しつつ裏をとっていく。さらに、撮影時期の異なる航空写真や、過去の地形図に記された植生情報、70年代以降のリモートセンシングデータなどを併用して、時間的な変化を可能な限り詳しく知る方法をとった。また、そうした伐採・放棄の履歴を知った上で、森林内に異なる履歴を持つさまざまな調査区をとって植生調査をおこない、植生や樹種の分布と人間活動との関係を調べた。

こうした作業から、調査を開始した当初は思いもよらなかつたことが、いくつかわかつてきた。ひとつには、数千キロにわたって広がる一見成熟した森林の中で、集落立地が可能な場所のほとんどは、たしかに百数十年前から現在までの間に伐採された履歴を持つということである。集落立地の最低条件は、川沿いや湧水地などの水場が近くに確保できることである。こうした条件にそぐわない場所には、集落ができることはないが、かといって残りの部分が無用の地であるわけではない。こうした場所の多くは、個人や集団の蜂蜜採集や狩猟のテリトリーとして認識されており、人びとは季節を選んで頻繁に訪れ、蜂蜜の巣箱の点検をしたり、狩猟をおこなったりする。

また、長期の時間スケールの中で集落の動態をみていくと、開拓後ある程度成熟した集落が、20年から40年くらい経過した後に放棄され、ゆっくりと森林に遷移してゆくという典型的なパターンを確認できる。森のモザイク状の植生は、こうした活動の結果として理解できる。一般に焼畑集落の放棄は土地の疲弊と結びつけられて理解されることが多いが、集落放棄の原因を逐一聞き取っていくと、必ずと言っていいほど社会的な出来事が引き金になっていることがわかる。すなわち、殺人や呪いなどの集団間の軋轢や、リーダーの死、他民族による略奪などの理由である。とくに、リーダーの死やある人の呪いによって、その場に災いをもたらす霊が宿り、集落の移動が不可避になるという事実から、移住が人びとのいわば文化的な信念によって維持される行動パターンであることがわかる。しかし、これは一方で、森林資源の利用という生態的側面にも密接に関連する。自然と社会・文化を別個に論じることによっては、このシステムを十分に理解することはできない。

このことは、1970年代末から進行した集住化と、同時に展開した草の根のキリスト教受容運動のプロセスを追っていくと、より鮮明にわかる。社会主义政権による集住化のプログラムや治安維持の強化は、マジャンギルの人びとにとって大きな社会環境の変化であった。そのような環境の変化に対して、人びとは定住化を積極的に受け入れるとともに、定住化に必須の文化的な装置を積極的につくりあげていった。キリスト教受容にともなう伝統的信仰の変容、草の根の禁酒禁煙運動、村の互助組織の創設などは、そうした外部環境の変化への対応の一環である。

これらは、完成した仕事というにはほど遠い。しかしともかく現在も研究を続けていられるのは、寛大なマジャンギルの村の皆さんや、エチオピア研究チームの方々をはじめとする人びとのおかげである。感謝しつつ、今後も努力を続けたい。

(さとう れんや 九州大学)



一次林内の植生調査